

鹽

尻

四扁

十一

1 曾 5
508
54



508
54

三十一

- 五經 其の附録あり揚井屋之下君子海産とあり
- サニセ 少知をそと玩つて高し一の曲と字多々婦人後人の口
- 今我形神家曰無上灵宝者道家之言也按経
- 籍志呼灵宝道経二十八部如太上靈宝護身符録靈
- 宝初謝天神儀靈宝安宅存儀是也又按以太上變無
- 上無上亦玄道経矣
- 春秋内事曰日者陽徳之母也
- 信景按本朝以日神配女躰固有故
- 淮南子曰月天人之使也

○ 信景按神代卷ノ書詠曰神以月讀尊造トコラ下土蓋取之
 ○ 文昌雜錄云軍中以端午走馬トク謂躡柳トク
 ○ 信景按我邦競馬走馬是之
 ○ 款名云吐也吐生万物也

○ 信景按神代卷有此意
 ○ 自伏羲畫卦而易之道著文王為象辭周公為
 ○ 文辭孔子為十翼而易之道始備秦火以下筆不廢
 ○ 唯矢詠卦三篇後河内女子得之漢初高易者三家
 ○ 其一則始于田何之十二篇以授丁寬再傳而得魯人之

易一書

○ 子孟喜存大梁丘賀共二則始于焦延壽而陳郡京房受
 ○ 之其三則始於費直而鄭玄王弼為皆偽之自是費氏興
 ○ 而田何遂息至唐孔穎達作正義獨取王弼之學季鼎
 ○ 祚之集解則取鄭而捨王陸德明之款文則宗京而尚
 ○ 數及宋程子之傳朱子之本義出而後理與象兩明焉
 ○ 三朋劉敞曰天子諸侯皆三門而名不同云云
 ○ 信景按浮屠以寺門稱三門者借也
 ○ 或曰般若三藏所譯威怒王秘密陀羅尼經曰大照
 ○ 衆圍吾稱日神号天照大神蓋依此經之意曰言抑

の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ

此の神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ
の神句を授けし神祀母名を所分先と敬ふ

湯東西一丈二尺五寸南北一丈五寸

深四尺計一二湯以末板浦之下三寸

計あけく庭を二丈一の湯を南を北の湯

後傳書光武祀東夷倭奴國と奴の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

倭の字ぬと

乃有之と云ふなり

○我敬公薨玉ノ前有以獻一鋪古墨跡其文曰
天五士ト是天數之五生士之謂ラ而讀者以為
天五十一ト天共一代倭音近シ然レム次ノ年
五十一ト而薨國人以爲識焉按采張端義
貴耳集曰本朝年号或者皆有識緯於其
間太平有一人六十卒ノ字太宗五十九而上
仙ト云ク可謂異域同日之談ト也

同集又曰天聖曰二聖人朋道曰日月

同道靖康曰十二月立ト康王嘉泰曰士
大夫皆小人有力者嘉等云異邦折
字而相統術皆識緯變風也

○王摩詰集云幸山洋日長河急之
○或人曰云同傳云所願云子云所代云所
○或曰云記云た云る云ま云と云る云所云丹波回
○節云多云の云神云に云深云打云克云知云術云の云凶云賊云と云海云せ云れ
○時云の云形云書云あり云保云け云る云不云の云ま云ま云之云信云る云書

ヤシて人心の如し

○ 魯三家原始 依或人之書記之 庚辰五月廿一日也

問昔魯國鄉三家有丁驕僭不臣也所謂孟

孫氏叔孫氏季孫也然^ル季氏庶家其疆

大孟叔增^ル何シノヤ答^ル私古記ヲ按スルニ魯

ノ初伯禽ヨリ十五世ノ主桓公存ノ襄公ニ殺サ

レシ^テ後莊公立テリ莊公黨氏が^{アヘムス}孟女任愛メ子

班ヲ生シム

子班長メ梁氏ノ女ヲ^{コト}説ヒシ^テ圍人擘ト云者^{コト}カニ

彼女ニ戯ルヲ觀テ怒リ擘ヲ鞭ツ下^リ其^レ後

有後^ニ擘班ヲ殺モ故アリ

莊公ニ三人ノ弟アリ長ヲ慶父ト曰フ^カ孟氏^次ヲ叔

牙ト曰フ^カ叔祖^次ヲ季友ト曰フ^カ季氏^祖是三家ノ祖

然メ莊公存國ノ女ヲ取リテ夫人トス^{哀姜}夫人

子無シ其^{イモ}嫡ヲ叔姜ト云ヒシカ幸セラシテ男ヲ生ム

コレヲ子開ト云 系本ニ啓ト云漢ノ景帝ノ諱ヲ避テ史記ニ開トシルス 莊公其本夫人ノ

子ナケレハ子班子開共ニ適嗣ニアラス其上莊子孟

女ヲ愛スル故コト七年モ長セシカ公子班リ立テ嗣ト

セント思へり然ルニ莊子病ニカ、リ卒セシトセシ時
弟ノ叔牙ヲ呼テ世子ヲ立シトヘリ牙カ曰
魯國昔ヨリ父ノ跡ヲ継モアリ兄ノ跡ヲハ弟
ニ及スモアリ慶父ハ君ノ次ノ弟ノ嗣ト為ヘシト
云莊公ハ叔牙カ慶父ヲ立シトスルヲ患ヘス季
友ニ問ハレシニ友カ曰班ハ君ノ子也我シ死ヲ以テ班
ヲ立シト云莊公曰先キニ牙カ慶父ヲ立シト云
シカハ是ヲ如何セント季友計ツテ魯ノ大夫鍼
季ヲシテ鴆毒ヲ牙ニス、メ飲シメテ殺シ其子

ヲ立テ叔孫氏トス

杜氏曰罪ヲ以テ誅スルニ非ス故ニ後ヲ立テ
其祿ヲ継カシムト云ヘリ

既ニメ莊公薨セリ季友即子班ヲ立テ魯公ト
ス然ル所ニ慶父己カ立サルヲ怒リ圉人犖初子
班ニ恨アル者ナルヲ知リ彼ヲメ班ノ殺セシム季友
カタラス其難ヲ避ケテ陳ニ避シリ慶父自ラ位ニ
即クモサスカナレハ一先莊公ノ次子圉ヲ立テ君トス是
周公也史記作氏慶父是ヨリ驕リイマシメ莊公ノ夫人

哀美ト密通メヒソカニトボクイ騎ト云者ヲメ肉ムヲ弑セシ
メ慶父自魯ムトナラント計リシカ季友己ヲ聞陳
ヨリ肉ムノ弟子申ト臣ニ邾ノ國ニ往テ兵ヲアク魯人
モ亦皆慶父ヲ誅セント欲スル故ニ慶父國ニタニラレ
ス出テ莒ノ國ニ奔シリ季友即子申ヲ率メ魯ニ入
リ君トセリ是僖公也史記作シリ季友莒ニ往テ慶
父ヲ求テ飯リ人ヲメコシテ殺サシム慶父ヲ後ヲ孟氏ト云
以此見ルニ叔牙先ニ殺サレ慶父後ニ害セテ兀獨
季友公室ヲタスケテ功有リ故ニ僖公己レヲ立ルヲ

悦ビ汶陽ノ鄭ト云地ヲ以テ季友ヲ封メ相トス
僖公立テ季友政ヲ專ニス故其子孫強大ニメ公室
ヲ無セシモ是ヨリ起シリ其後僖公薨シ文公立テ
三子有リ長ヲ惡来ト云次ヲ視ト云次ヲ子伋ト云へ
リ文公薨メ子伋公子遂ト云者ヲ史記ニ仲襄頼ニ
齊ノ國ニ分リ合テ世子子惡ヲ弑シ伋自立テリ
宣公是也始ニ季氏僖公ヲ立今遂宣公ヲ立故ニ
權柄皆臣ノ手ニアリテ君ハ空名ノニ以此公室日々ニ
卑メ三家年々ニ疆シ宣ス彼ヲ去ントセシモカナハス

〇 冕セリ成ム衰ムヲ経テ昭ムノ時三家ヲ滅サント
 セラレシカ事不成而却テ三家公ヲ伐ツ遂ニ公出
 奔メ後他國ニシテ卒セリ魯人共ニ昭ムノ弟采
 ト云人ヲ立ツ定ム是也三家増ク盛ニ也定ム冕メ
 衰ム立魯君ノ國政ヲ失ヘル久シ孔子ハ定哀
 ノ時ニシテ三家驕僭ノ日也論語三家ヲ云ヘル
 丁多シ此レヲ考ヘテ其時ヲ知ルヘシ
 〇 宋ノ國子司業其宗義カ所著スニ礼圖ニ曰衣
 冕云古ヘ天子ノ冕服ハ十二章王者相變シ

至周而以日月星辰畫於旌旒所謂三辰
 旒旗照其明也而冕服九章之云々冕服皆
 玄衣纁裳朱黻素帶朱裏又朱緣ヲ以テ終禘ヲ云
ノロキヤミ アカクノモ アケノヒツホシ シロキ
 信景按冕服之色此書謂之詳也予初
 尙識者而無知之者幸今繙此書得ク之
 備遺忘耳

〇 兵を稱するは兵位の小なり兵徳の小なり兵威の小なり
 兵ありては民之なり是兵士の字にありては兵
 の防身之兵士を礼の王侯に兵士を

よあり注り通るの處士なりと云く又其後
改有漢流の兵士の号高田の時執出ると云り
韓非子と稱するは用ひて兵士任高幸仕を
よ兵士二人よりなりと云りこれ兵士は
石はの号處士と同しと云く之が畷耕等兵
考へ多し又御書と云ふも古くは小王將
軍長者兵士軍官諸家の等ありと云く
今王侯の古も兵士と云くは
分りいふ

宋景濂集曰東ノ曲ノ注曰其國購得テ諸書悉
官判之字々此間同但讀之者語言絶異
又必侏離順之讀下後逆讀而上始為句
所以之義虽通而其為文終不能精暢也
云々

按 我國讀書有字音有和訓直讀
逆讀而後得其義故比異知讀書者
則不其只勞耳又誤文義者不少學者
深理會字義可之

○ 少希家記ありたりなるのゆゑ多し一何氏とて
所抄りしやうりたるの多し一その中より
秋のたぐんと云々たるの二その初秋と云うて
返りたりるなり

久々読し一まゝりの光わつてわけてまのすまを
わたり

仲分派と云ふものいふまゝを伝へし所の記を

○ 希子の書多くハ慎の字無し是希字は願障と
遊せうり 我回あると筆をり人をも筆のほく
一少と忘る希子の書と誦する人先のく事と

○ 希子の書と云ふ

○ 亭景尽 長亭短景無人盃

老節節 老大横挽 瘦行節

首雲暮 回首断雲斜日暮

江灘峯 回江倒醮小山峯

一夕話

○ 譲と謙と固小ありたり南子一所
謂蒼吾抗りたりと我兄不譲り然性曲を
一不謂黃公已り女心謙りて醜なり

質素の宮造り、いふか、華美の宮造り、
修實基木紀等神宮の四記に、梓木の記あり、
之を造制と神祕と云ふ、後世造り宮の制を
定りて、後世に於て万物の象と云ふ、
あり、
岩屋本編、不堅木と、早宿の權化四列、
廻生
の表を示さんと、
置形、
心御柱記に、
蓋稱、
書、

少や神祕木源の心、
豊受、
下、
凡の、
草、

善哉句なりと云物と見く去る
堅魚カツノ
の名を万葉にも見くされ其を奉り旧きを
言人扱心法柱を左神宮或北法北法カクテ早北カクテ
物忌法將基北北城心法柱穴穴神皇堅柱其
築平ツキヘイ殿地ラニ是則法柱をの物なり柱を
殿片のの中をさるるを神皇家の造り
此多ふ足なり今日の風俗も家柄も殆ど柱立
やと一柱の柱をさるる工匠法柱をさるる
殿字紀の室ムロ壽ホキの中ツキヘイ築立柱者此の家長

御心之法之少くも造元堅柱のタニコト柿カキ之
凡上代何の象と云ふなりと云ふは流や秘次
法の真なりや後世制定りて後にも象と云
自ら理をさるるをの多し或は其を物と祝
ふ。柿カキ之と云ふは人の徳と秘とせしむる
少や且陰陽家の北法なり混りてあり
或は密字の北法よ今も心法をのみを柱カキと
謂ひ其を文と云ふなりと云ふなりや
史記シキの事なりと云ふなりと云ふなり

我國の神祠の三より我多々姓名は門人今もよく
志村所にはあぢふ様もとりし〜〜〜もあはれ
つあり是をいふといひしに在り〜今も其の
多を指を足し〜古所を忘れ〜〜〜あはれ
況あり

○ 壬午の春に武の人から来るといふ

八十ありひりし〜〜の古所は是も様も御ん
我有下社も〜〜臨着同年の春に法を相ち

ムツシカウ
一平二下〜〜法も二平六中〜〜〜ありと

○ 式々△壬午二筆

括異志に宗の至和中成都の費孝之堂〜
之の古殿は北に法り〜一老人の行を廟を
懐り即ち直を償せし〜一人物〜曰子
之下〜と視りやと考へ是を〜法を廟に
〜壬午月日造る〜その年月日懐んや書ん
あり〜且即某年月日あり〜〜
是を〜と〜〜成懐哲人字あり〜
〜る〜の〜これを一膳の着る法〜人百

摩多舞のあつたをいふも同く其人區々
多きを偏ひたをいふも同く中人悔く
命りやまんせきるいものいふも同く
心物収固りいふものいふも同く

○ 山城の四橋神社

イナリノ名義説く方同予 橋氏ノ橋

依此女命多々大歳持神の子なり等々

イナリハイナリノ轉語也

○ 名古之左衛門某、尾尾也、知教、古酒村

人也其父謂源左衛門某曾仕森武藏守
移居于濃州兼山天性羨群而治客自喜
且好武藝輕率為行一旦武藏守欲殺某
臣某氏而使其遺他州將刺于路名古屋
氏請曰願使臣擊之則足武州以其年少
且質美惜之不許名古屋氏再三請之不
止於此竊屬一勇士遺之名古屋氏獨急走
与某氏闘于路殺之然名古屋亦蒙疵而死
始名古屋於尾州領五十貫之地云々

是往日所聞。沢井楓軒老人也。按雍品
府志。以名古氏為京師戲場男風之
始。不知孰是因云。關東小六者。本伊達氏
某僕。在東都而游俠於曠。當時呼之稱
伊達小六。今以治容游俠者。曰太天テイト似
彼シカ人風也。

○英法士廣尼の松尾寺に女代の比丘尼は縁
あり尼寺今沢紙後寺殿時の女寺なり是利澤原
寺源右代の法書に尼の法後小部家母句に云云尼

寺に女代松尾寺に女代の比丘尼は縁
あり尼寺今沢紙後寺殿時の女寺なり是利澤原
寺源右代の法書に尼の法後小部家母句に云云尼
寺に女代松尾寺に女代の比丘尼は縁
あり尼寺今沢紙後寺殿時の女寺なり是利澤原
寺源右代の法書に尼の法後小部家母句に云云尼
寺に女代松尾寺に女代の比丘尼は縁
あり尼寺今沢紙後寺殿時の女寺なり是利澤原
寺源右代の法書に尼の法後小部家母句に云云尼

福翁志千石ノ城陸奥守平泰盛ノ女ノ人

名をいふと一しり別くハその多しりし
かんこを^{正イカ}野分の唐名ハ野分を新語に
之をもその類抄程を一一本集の集解し
るしり

○ 倭俗以三月三日為海潮盡期按銜積霏
雪錄云海扇海中甲物也云く三月三日潮盡
乃出云く然則金異邦以三月三日為海潮退
盡期^ト

○ 沃浮とれりしと和訓所拘ふ本集のあと

いし考れをたれりし小あはり意姑ハ一
たもだりなり

△ 世帯木指掌圖

○ 木帯^系 冠ノ秋派

上帯病下帯堂上地下の帯のつらた糖いには名を長を
納を參議の木帯ハ^{下帯}の^系の老手類を^{下帯}の人林と
あしし木帯ハ公をりし小あはり類を^{上帯}の^系の

表袴 下袴
 布八寸よりかきつきの文ありしは位六位の末等仕
 たるも庭八寸半よりわらう子ぬる位六位の堂上地を
 けし履きききぬの類ひと在男女をわける紐糸より類ひ出さ
 替ふもきぬ人の一那衣人より調度よりぬきぬき
 二位の中の極高字の位調撫よりきぬ衣府場のきぬの位
 の官人指巻より文ありしは位六位の堂上地よりしきぬの
 指巻の細文よりしきぬ衣よりきぬの位よりしきぬの
 堂上地よりしきぬの位よりしきぬの位よりしきぬの位
 看用次第

先冠 懸緒 次赤大口 次襪 次表 袴
 次大帷 有復々々 次裾 有復々々 次位袍 有復々々
 次石帯 次劔 年揃 次笏
 次浅履 或緒太
 正從一位

正一位者現在之人不叙之從一位或撰園
 或大臣或前官大納言叙之
 掾袍正曆以来被着之大臣者異文依
 家々替有之

○ 正從二位

年勞ノ大納言叙之或攝關叙之或左大臣
或二位ノ中將有之

袍同上大納言以下文或與唐草或瑞雲

二依家例

○ 正從三位

二位以上是公卿之位之納言冬淺
叙之或三位中將有之

袍同上

冬淺者雖為正位是公卿之故袍下

者袴指費等同

三位以上下並者袴又指費是文以下

二三位者有袷家袍ノ又用右但下並者

袴指費本儀之文之雖是或指家或指

花ヨリ指費而用者文

○ 正從四位

正從四位上
正從四位下
初位以上搦云法在但正從四位冬淺
二卿之位之亦正從四位中少將是人辨官也納言

仍從皆當之

袍同上西唐以素以上一回三極又之以下指素素絳
以位以下素上地下一回素文之又指素素之文
紫緯白或紫平年絳之地下及左

雖以位左臣子孫又為人皆隨禁宮殿下
指素素絳指素等內公卿有文地下一也位志
卯化史或誌寮法司一官人又社家之袍下
指素素絳同也但指素又淺黃年絳之
武家阮雖中少將仍從板之用紫一指素

淺黃一緯白之

正從五位上

或以將辨官為人少納之仍從以府姓統
以下叙之是素也

袍緋又下指素素絳指素同上

此以位德禁文之人又為人之下下指素

素絳指素等同上但袍又用緋地下一

以位志卯化史或誌寮法司一官人少社

家之或內一人叙以位之袍又同也素

同上

由家流諸方丈七位六位指費成矣

平儀

正從六位上

六位為人亦地下ノ諸日官人叙之

袍孫受文三位以下惣母文之又下袍孫

袴指費同上

雖六位為人下袍孫袴指費等同一袍

又下用孫于中袍為八袖麁ノ袍着之是

袍服之中

地下少知記以下諸日ノ官人又社家叙之

袍以下同右を代武家ノ人不叙三位

△輻輳故事

○後古法所流沙慈九年丹家流形在表徴

の目あり一は疾葬提御儀あり一放買提

しあり一丹内儀の思戸に並あり一更

既に四十餘日漸少一々泉涌寺に葬

あり一やあり

後柏系院踐祚より二十二年の後
永承元年母法皇位の禮を以て家元も又元祚
別加正行より西三條の實際を以て慈之
本教寺の傳信業院殿如に議り費料と
乞ふが如くより新ふれり是れ先
仍ち殿如と大信正に似り内治の事
多し家元と云ん

後永承元年母法皇位の
の禮あり大内義隆費料と進り一叔大宰

大貳小補せられ一之正親町院踐祚の後元年
永祿三年母法皇位の禮あり一毛利元就
費料と進り一多々大指方美より可下され
多々家元と云

鳴呼四君喪礼の極ふあひ多し如系北道の
上と云えあり一は時法州大母礼を杖簾給
せり一は云卿色部に離都一法儀り
容合せり是又多一將軍家中に在り位
の女持り職の女持りと云り是れ名高富

藤原朝臣光子

右可從一位

中裕慈息益深温榮克々倭仰顯賢德大
幸舉無疆壽宜授榮將以冠朝章可依

前件王者施行

韓文云蓋棺事始定

嗚呼人心危如雲雨豈於在世定其事
可否唐明皇開元之治淳文已去無出
於其右然至天室國亂遷都實不筑

佳城前不可輕定其事

古歌

多む心いそがきんたのうらまは心あり
人心すくくかみのこころのそもくくそ
此やありけり定乃くそゆ系男女の情々
うらまは心いそがきんたのうらまは心あり
けりそ実にもうまのたのうらまは心あり
これや心いそがきんたのうらまは心あり
やんやん心いそがきんたのうらまは心あり

世と世も人ごとと云

。母後の信候りて有りありて死流の海を免る
糸にりて心ほそすのうくれをきまらぬも

昔よりうらうらと云

此より一巻をねと感へ信下れをいふ
日本之云々

新海舟の福人八幡に我身多災を免る
その代の信候りて知りて夫新海舟
ありてとあるとてき福を祈ふ候りて

山の上の信候りて我身多災を免る
と護神とていふ武勇の人也を甲に
多災を免る長きを祈る候りて神人
命をいふにのみ多しといふ事多し
免る福吾疾皆去りて祈りて求む事
之能く人佛神とて先くゆられ八
むらうといふ

問津閑筆

唐子西庚失茶具戒婦勿求婦曰何也應

川をりといふ句

おののちもはるふりか

道きくは流れ流れのきもはれきくおのちのちの水

△凝寂堂筆記

○漢武故事云景帝時延尉上固防年^レ純母陳氏殺年父年因殺陳依律殺母大逆論帝疑之詔問太子太子對曰夫繼母如母明其不及也緣父之愛故謂之母^レ今繼

母無狀半殺其父下平之日母恩絶矣宜与殺父者同不宜与大逆論帝從之議者稱善^下云

○庚辰の春秋西郊の法平の島に於て古林秋掃けく拉人穢之幽徑風をくしと宿鳥ありまゝむしう光仁の西行の河内掾の紀是後子光麻呂とて死して返魂香を焼くあしりしとて世に傳はり香物の多かりしをたすむれに知る人ありしとて正法寺の内母

○司馬公曰君要聞其過則忠化為佞君樂
聞直言佞化人為忠

批上一覽

司馬子十科舉士法

行義純固可為師表
節操方正可為軌範
知勇過人可為將帥
公心聰明可為監司
經術精通可為講讀
學問該博可為顧問
文章典麗可為著述
善聽獄訟盡公得實
善治財公私俱便
練習法令能折請讞

元祐九年秋七月奏立

○我今年致仕歸故鄉仲冬廿九日夙發江
戶邸臨別賦詩遺男九成父不如點信口
漫道一笑胡盧

七

元祿庚午冬道跡東海濱致仕解印綬
縱作葛天民盤施廣莫野洗滌榮辱
塵昔誕首陽薇今美安江蓴三十有年
耒夙志忽不存予去又何處不知再會辰
嗚呼汝欽哉治國必依仁禍始自圍門

慎テ勿乱五倫朋友尽礼義且暮慮忠純君必
古謂蚤不君臣不可不臣

梅里光國

前按中納公光國卿宣休の時細條卿へまじり
せしれしとやあつれを後り守康志もまわ
やうみまこころをさふ

。 雙角五爪ノ龍ハ天子服御之彩紋也臣下ノ三
爪龍也今畫龍一為三爪倭畫工不知有
五爪龍也

